

韓国人のエスニシティ形成と白頭山「巡礼」

——その歴史社会学的考察——

真鍋祐子

(秋田大学)

はじめに

(1) なぜ、白頭山なのか？

李文烈の中編小説に「弟との出会い」という作品がある。主人公の「私」、李博士が中国朝鮮族プローカーの手引きにより、朝鮮戦争で生き別れた父の命日を知るため「北」に暮らす異母弟に会うという物語である。そして「私」は恵山をのぞむ豆満江の岸辺に弟をともない、北に向かって亡父への祭祀をとりおこなうのである〔李 1994：9-88〕。

1994年に発表されたこの作品をベースに、KBSでは99年「離散家族の悲哀と同胞愛」を主題としたテレビドラマ化を企画した。ところが「ドラマ放送史上初の白頭山ロケに出発する予定で」あったのが、中国側から許可が下りず暗礁に乗り上げてしまう（傍点・筆者：『スポーツ朝鮮』6月1日付）。それにしても奇妙に思えるのは、なぜ原作にはない「白頭山」がロケ地に選定されたのか、という点だ。原作では団体旅行の一員として延吉を訪れた「私」は弟との邂逅に備え、わざわざ白頭山行きをキャンセルしたというのに。またそこに描かれるのは「離散家族の悲哀」ではあれ、「同胞愛」というテーマは希薄にうつる。むしろ作者は、韓国での出稼ぎ暮らしで労働力を搾取され、落ちぶれて帰ってきた流行らないカフェの夫婦を登場させ、「それでも名目はひとつ血筋、ひとつの同胞なのに……」と語らせることで、逆に韓国人の「同胞愛」の薄さを告発しているようでもある。

KBSの製作陣がことさら「同胞愛」を描こうとした意図については留保するにしても、それではなぜ「同胞愛」は即「白頭山」に結びつくのか。またロケを拒んだ中国側の危惧は、近年増加して

いる韓国人旅行者のいかなる性向を暗示しているのだろうか。

(2) 「観光」と「巡礼」

1989年に海外旅行が解禁された韓国では、韓国企業の海外進出、社会主义圏との交流実現とあいまって、91年6月より中国入国ビザの発給が開始され、翌年8月には中国との国交も正常化された。中国でも辺境にあたる延辺への本格的マス・ツーリズムの開始にはインフラ整備と観光開発の面で3年ほどの時間が要され、旅行社主催のパック・ツアーは94年頃、本格的な商品化にいたった。ちなみに前出「弟との出会い」も94年夏という設定である。その後、急成長をとげた海外渡航状況は97年末のIMFショックでいったんは失速する。『韓国観光統計』からの算出によれば、98年は自肃ムードに押されて32.5%マイナス成長を記録し、中国への渡航者数も17.2%ダウンした。だがいずれも50%前後の激減を記録した他の国々への渡航者数に比べると、これは最低の減少率で、逆に99年には64.9%という最高の増加率に転じている。なお、中国への渡航者数は毎年7～8月に集中する点から、事実上これを白頭山への旅行者数と読み替てもよいだろう〔真鍋 2000：81〕。白頭山の天候は変化が著しく、年間の大半を風雨と霧に包まれている山頂のカルデラ湖・天池が姿をあらわすのは、7月半ばから8月前半にかけてのわずかな期間にかぎられるからだ。

一方、98年に金剛山観光が一般に開放されたことで、白頭山はしだいに中高年層の客足を取られつつあるとの見方もある〔Kim 2000：74〕。経済と余暇に恵まれたこの世代はマス・ツーリズムの主たる担い手として、「異郷において、よく

知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」〔橋本 1999：55〕という意味での、純粹な「観光」の消費者といえる。だが白頭山が旅程に組まれたツアーでの参与観察や、白頭山旅行を経験した人々への面談調査をこころみた際の印象では、祭祀を目的とする離散家族の例を除き、金剛山と白頭山とではもとより旅の目的が異なっているようである。後者をめざす人々のうちには、ある独特の思い入れが感じられた。彼らの多くにとって、そこは聖なるものとの個人的な「交感」の経験が、仲間内で「共有・共感」される場所である。行く先々で遭遇する事物もまた、一定の文脈にそって「聖化」され、崇拜の対象となる。そういった「目的地に対する観光者の思い入れの度合い」が、「観光」をかぎりなく「巡礼」に近づけている〔同上：82－83〕。白頭山旅行を「巡礼」ととらえる人々とは、後述するようにエスニシティ主義のナショナリストたちである。財閥主導による金剛山観光には強い拒否傾向を示すものの、白頭山へ向けては彼らもまたマス・ツーリストとして毎夏、大量に送り出されていく。たとえばハンギョレ新聞や月刊マルなどの左派メディアと協同して、「白頭山巡礼」を業務の第一義にかかげるS旅行社では、白頭山は「民族愛を高める」場として位置づけられ、高句麗遺跡とワンセットで旅程が組まれる。ちなみに元運動家の経歴をもつ社長によれば、同社で金剛山観光を扱う意思はない、という⁽¹⁾。つまり白頭山をめぐっては、それぞれに「観光」と「巡礼」を指向する団体旅行のタイプが併存し〔真鍋 2000：83〕、前者の集団は金剛山へも流れうるハイ・ポテンシャルを予想させるが、たぶん後者はそうならない。むしろこの集団はリピーターとなる確率が高いと思われる所以、金剛山観光の自由化が即、白頭山への客足を大幅に左右するとは考えにくい。

次章では、このように「観光」とは一線を画した白頭山「巡礼」への思い入れが、いったい何に起因し、またいかに「同胞愛」「民族愛」へと結びついていったのか、檀君崇拜を手がかりとした歴史社会学的考察をこころみたい。

1. エスニシティ主義と「創られた伝統」

(1) 「愛国歌で歌った白頭山に登る」ということ

1984年、まだ中国と国交がなかった時代、韓国籍者として初めて白頭山に登頂したのは国文学者の陳泰夏であった。彼が白頭山行きを切望するようになったのは、招聘教授として台湾の国立政治大学に在職していた67年、かの国の地理の教科書を目にしたときに受けた衝撃がきっかけだった。そこでは幼少時より「東海の水と白頭山が乾き尽きるまで／ハヌニムがご加護あそばす、わが國万歳」で始まる愛国歌でなじんできたあの白頭山が、中国領内に描かれていたのである。その後、彼は崔南善（1890～1957年）の「白頭山觀參記」（26年）を愛読し、白頭山への思いをいっそうつのさせていく。登頂後の手記で、彼は、「白頭山に登ってわれわれの国祖檀君が国を開いた太古の地、ひいては私自身のルーツを確認したかった」からだと、その理由を述べている〔陳 1984：106〕（99年6月、面談調査による）。

本稿にとって、陳が語った上記のいきさつはきわめて示唆に富むといえる。彼が白頭山への思いを喚起させられたのは、国境や領土に対する意識の覚醒にほかならなかったからである。これはただちに檀君という民族の祖先とその歴史をイメージさせ、さらには檀君の末裔、すなわち倍達民族の自己意識へと結びつく。じじつ白頭山麓に暮らす朝鮮族との出会いから彼が感じ取ったのは「わが同胞たちの純粹な同胞愛」〔同上：106〕であり、いうならば民族としての連帯感であった。そこに作用したのは48年の大韓民国成立以来、文字どおり“愛国儀礼”として斉唱されてきた愛国歌であり、それは「国家（ネイション）」の誕生とともに「創り出された伝統」〔ホブズボウム 1992：25〕のひとつといえる。

ただし愛国歌はそれ自体、朝鮮の近代国家への変革をめざした政治家・尹致昊（1865～1945年）の作詞とされる。本来「螢の光」のメロディで歌われていたものに、現在の曲がつけられたのは39年で、これが重慶の大韓民国臨時政府（40年に上海から移転）に受け入れられたのである。こ

の事実から、愛国歌という伝統は、すでに大韓民国という国家の成立以前に創出されていたことがわかる。そこで白頭山が歌われることの根底には、もとより「朝鮮山脈の祖山」（『大同輿地全図序文』）、「わが国の祖宗の山」（『英宗實錄』）などと呼ばれてきた、風水上の“白頭大幹”という認識が関与しているのだろう。

そこで本稿が注目したいのは、第一にホブズボウム〔ホブズボウム 1992〕やアンダーソン〔アンダーソン 1997〕などに代表される「近代主義的」見解を批判し、ネイションの形成過程にエスニックな起源を見出そうとするスミスの視点〔スミス 1999〕である。大韓民国というネイションの成立基盤にエトニ（エスニックな共同体）としての朝鮮民族を同定すれば、白頭山をめぐる陳泰夏の思いはエスニシティ（エスニックなアイデンティティ）の発露としてきわめて自然である。スミスはエトニについて「共通の祖先・歴史・文化をもち、ある特定の領域との結びつきをもち、内部での連帯感をもち、名前をもった人間集団」と定義し〔スミス 1999：39〕、地域主義や郷愁、起源神話などの宗教的信仰や大伝統としての組織宗教、国家間の戦争状態における動員・神話・共同体の位置（外部集団への「敵対的アイデンティティ」）などのうちに、エスニシティの「基礎」を確認する〔同上：40–50〕。「白頭山はわが韓民族にとって、すでにたんなる山の名ではなく、わが倍達同胞ひとりひとりの胸に存在する民族の靈山であり、国土の聖域であり、統一された信仰である」〔陳 1984：104〕という陳の言葉は、これらの点を裏書きする。

第二に、上記のことがらを考察するにあたり、大韓帝国および大韓民国というふたつのネイションを弁別する必要がある。ことに、わずか13年の命脈ゆえ朝鮮王朝のたんなる「延長」として等閑視されがちだが、じっさいは朝鮮が中国からの自主独立をめざした初のネイションともいるべき大韓帝国（1897～1910年）の意義と、そこに流れる大韓ナショナリズムに関する議論〔原 1999〕に注目したい。

（2）愛国歌の誕生、檀君神話の再発見

前出の尹致昊は大韓帝国の成立前後、「独立協会」運動を通じて君主を中心とした「啓蒙的」な主権国家をめざし、『独立新聞』『独立協会報』を発行して民衆に国民意識を喚起する一方、国王を皇帝に推戴し、国号を大韓帝国に改めるなど、独立国家の体制を整えるのに奔走した。アメリカ留学を経験したキリスト者の彼は、「産業文明国＝善＝永遠の至福、非産業文明国＝悪＝永遠の滅亡」という二元論的世界観から、西欧人を「文明化」の良心的教師とみなした。そして非西欧人が物質的豊かさという神の恩寵を得るには、まず國家文明化に向けた献身を動機づけるような「愛国心」の涵養が必要で、国家はそのために国民啓蒙教育を遂行すべきだと主張した〔梁 1996：20–68〕。そんな彼が愛国歌を作るのは至極もつともな行為であったろうし、彼のめざした大韓帝国のあり方自体、近代的ネイションを指向するものであったといえよう。愛国歌の結びで「大韓人よ、大韓へと／永遠に保てよ」とあるように、そこには過去から未来に継承される「名前をもった人間集団」が「大韓人」として歌われる。大韓ナショナリズムとは檀君を民族固有の始祖神とし、その系譜が朝鮮王朝と大韓帝国によって正しく継承されているとする考え方をいうが〔原 1999：54–55〕、これは愛国歌にも投影されているはずである。

原武史によれば、大韓帝国には大韓ナショナリズムのほか、皇帝の存在論的根拠を「天」に求める朝鮮王朝以来の儒教イデオロギーと、近代天皇制を模して皇帝崇拜を臣民レベルで浸透させようとする統監府の思想が併存していた。つまり「中国と日本という新旧二つの帝国をモデルとする思想に、大韓帝国の独自性を強調する狭義のナショナリズムが加わり、三者がせめぎあいを演じ」ていたのである〔同上：62〕。檀君が建国の祖として語られ始めたのは19世紀末からで、この言説を引き継いだ大韓ナショナリズムはジャーナリストや民間知識人により主導された〔同上：58–59〕。檀君神話は高麗時代、僧の一然が著した『三国遺事』を典拠とするが、その最初の項目にこれが取り上げられたのは、当時の元の支配への

対抗的なエスニシティのあらわれと考えられる。このことはスミスによる以下の命題を裏書きしているといえよう。すなわち、「エスニックなルーツ」は近代以前から存在しており、それらの過去が近代のエトニティネイションによって「再発見」、「再構成」されるとき、「古いものをこのように新しく結びつけるのは、とりわけ、自分たちの『ルーツ』を探る知識人の仕事にほかならない」〔スミス 1999：210〕、と。

さて大韓帝国滅亡後も、大韓ナショナリズムは「日本の植民地支配へのカウンターとして」〔原 1999：63〕、知識人のあいだで生きつづけた。国史として檀君を叙述することの重要性をいち早く認識していた申采浩（1880～1936年）は、歴史を国家抗争のプロセスととらえ、歴史学とは単一民族性、神話、伝説、英雄、事件の探求を通じて「国魂と独立」を鼓舞すべきものと考えた。30年代、彼は古朝鮮時代をもっとも独立的で壮大な時代として描出し、ことに檀君を政教一致の全権を掌握した「東国」の祖として神聖視したが、そこには檀君を朝鮮民族の救世主と崇拜する檀君教の影響があった〔Pai 2000：63－65〕⁽²⁾。スミスは過去の共同体を再発見するにもっとも有効な学問として考古学、言語学、文献学をあげ、さらに共同体を位置づけてその「眞の状態」を明らかにする方法として詩的空間（風景）と黄金時代（歴史）をあげたが〔スミス 1999：213－234〕、これは崔南善の「不咸文化論」（28年）や「白頭山観参記」にもあてはまる。

檀君神話の意味をシャマニズムの視点から解き明かす崔南善の研究には、日鮮同祖論に依拠した植民地人類学者たちの影響が認められるという〔崔 2000、Pai 2000〕。当時、日本人と朝鮮人の類似性を明示する「科学的証拠」として、日本人学者の考古学的、形質人類学的な研究成果が政治言説化される一方〔Pai 2000：12〕、民族を中国の史書に記録された国家と同定する方法論がとられたことで、民族決定観や優等民族による淘汰理論が正当化されることになった〔ibid., 49－53〕。日清・日露の戦争で勝者となり、優等民族意識が高揚していた日本人学者たちは朝鮮同化をめぐり、朝鮮人の満州起源説とともに、漢族と倭族による

文化的進攻の帰結として朝鮮停滞史觀を論じた〔ibid., 55〕。崔は朝鮮を東アジア文明の中心地とし、檀君をそのシャマニズム系統の“不咸文化”の源に指定したが、これはちょうど日本人学者における自民族中心主義が反転したかたちといえる。彼の研究視点はタイラーの残存概念にもとづく文化進化論であり、30年代以降、不咸文化圏の核に神道をすえて朝鮮の民間信仰をその残存とみなし、40年代に入ってからは大東亜戦争を支持する親日派に転じたことは、東アジア文化の同質性と同源性を説く不咸文化論がその中心地を移動させた結果にすぎない〔崔 1999：60－69、川村 1996：39－40〕。

（3）白頭山をめぐる郷愁（nostalgia）の形成

20年代までの崔南善は反日独立的で、三・一運動では独立宣言書を書いたこともあり、ラジオや新聞などマスマスメディアによる檀君イメージの普及に努め、民族意識を鼓吹した。それに呼応するように『東亜日報』では22年10月3日（陰曆）の開天節を期して檀君の肖像（懸賞公募によって選ばれたもの）を掲載し、いまだ檀君への認識が希薄であった一般民衆に向け、その存在を啓蒙した〔崔 1999：58〕。崔は考古学的関心からシャマニズムの比較研究をおこなった鳥居龍蔵の影響を受ける一方で、“光”“明るさ”を意味する朝鮮語“palg”に注目し、白頭山（Paekdusan）の「白（paek）」の由来を言語学的に論じた。すなわち、バルカン、パミール、ブルガリアなどの地名も同一語源で、白頭山からバルカンにかけて分布していたモンゴル人、トルコ人、日本人などは、このようにかつて朝鮮人と慣習、言語、宗教、社会制度を共有していたわけだから、いずれも不咸文化圏に統合されるべきだという。ちなみに「不咸（Pulham）」とは、紀元前4世紀の中国の書『山海經』に「大荒之中 有山 名曰不咸 有肅慎之国」として登場する山の名で、彼はこれを白頭山と同定したのである。また、こうして白頭山に付与された「光明の世」への信仰が檀君神話と結びついたのも、彼自身の「白頭山観参記」によるところが大であろう。それというのも『三国遺事』には「雄率徒三千 降於太伯山頂〔即太伯今妙

香) 神檀樹下。謂之神市」とあって、檀君の父・桓雄が天下った太伯山は現在の妙香山(平安道)と明記され、じつはこの書のどこにも白頭山の名は見当たらないのである。にもかかわらず、彼は次のごとく断言する。

「遠い昔から語り伝えられてきたところによれば、朝鮮人文〔朝鮮の民族文化〕の創建者〔檀君〕は、じつにこの白頭山を最初の舞台として、いわゆる弘益人間〔広く人間世界を利すこと。檀君の建国理念とされる〕の喜劇の幕を開け、その劇場を神市と呼んだという」〔崔 1994: 38〕(傍点および〔 〕内の注は筆者による)。

ここで想起されるのは、「政治制度、イデオロギー的な活動や集団——とくにナショナリズムにおける——といったものは先例がないため、たとえば実際の歴史の連續性を超えた太古を疑似小説化ないし捏造することによって、歴史的な連續性すら創り出さなければならなかつた」〔ホブズボウム 1992: 17〕(傍点・筆者) というホブズボウムの指摘である。じっさい考古学、言語学、文献学などを総動員して創出された彼の不咸文化論はその後、檀君の末裔たる朝鮮民族の聖なる故郷としての白頭山の重要性を一般民衆に啓蒙し、それにより白頭山は檀君生誕の地として民族の独立精神(*chuch'e*)を具現化する場となった〔Pai 2000: 68–69〕。檀君神話のマルクス主義的解釈をこころみた同時代人の白南雲(1895~?)が申采浩や崔南善の研究を「ロマン派」と断じたように〔ibid., 69〕、こと崔南善の「白頭山観参記」では「ナショナリストの救済劇」〔スミス 1999: 212〕的な側面がきわだち、詩的空間(風景)と黄金時代(歴史)が縦横に駆使される。ここにはすでにアーリがポストモダン・ツーリズムとして論じた、文化資本にもとづくエリート主義的(孤独主義的)な見方としての「ロマン主義的なまなざし」〔アーリ 1995: 154–158〕が見出される。朝鮮教育会主催の白頭山・鶴綠江一帯博物探査団に参加した崔は、3週間にわたる行程の雑感をおおりに書き送っては、『東亜日報』に連載した。白頭山の一帯は、そんな彼の眼前に、まさしく詩的空間として展開していくのである。

たとえば山麓の密林地帯に達し、そこが300年

ほど前の白頭山の噴火で一度は灰燼に帰した場である事実を知ったとき、彼はそこに「ひとたび蘇正され、ふたたび蘇る輪廻」を思い、「焼かれたる地! 私はそこにツアラトゥストラを見た。ソロモンを見た。釈迦牟尼を見た」と興奮気味に語る。「火かき棒のあいだにひっそりと満足げに咲いている名もない草花たち」を目にする胸中には、スミスのいうように、「恐怖と畏怖の心が生まれ、この心は、自然へのロマンティックな執着へと流れこみ、自然崇拜の贊歌へとゆき着」いた〔スミス 1999: 217〕に相違なく、彼はその場で「両手を合わせ頭を垂れた」のだった〔崔 1994: 37〕。やがて自然崇拜の贊歌は、路程を阻む暴風雨のなかにさえ、「明らかに“おまえのおこないを考えてみよ”とおしゃる白頭山オモニの涙の鞭」〔同上: 56〕を感じさせ、超越的存在への信仰心を呼び覚ますのである。また1712年に清とのあいだに立てられた定界碑——国境を定めた標識——に接すれば、ロマン主義的な目と耳は彼をして、「人間の意思を帶び、また重大な使命を帶びて風雨の200年、白頭山を守ってきたのがこれひとつだけかと思うと、この手のひらほどのひとかけらの石がいかに貴重か」と、そしてこの小石こそ「これまで214年間の朝鮮人の怠慢と恥の弾劾者」として、「聞く者のない場所で何度も何度も叫んでいる」と、ささやかな靈氣を嗅ぎ取らせる〔同上: 52〕。

なぜなら白頭山の“靈胎”からは「神市、檀君、扶余、數辰、高句麗、靺鞨、渤海、金、女真、滿州」がはぐくまれたのであり、そうした黃金時代の体現者である白頭山を等閑に付すことは、彼には「国土的、歴史的な不忠実」、また「何よりもの大罪」と觀念されていたからだ〔同上: 6–7〕。「聖なる山を背に負い、聖なる森を抱き、その奥深く神秘的でなだらかな広大さ」、「山々が周囲をめぐり、河が地を潤し、その広大な雄麗さ」と表現される自然の場は、「原始国家の発生地」から「近代国家の成長地」へといたるもっとも秀逸な歴史の場として、時間の断絶や複数の過去の矛盾を一気に埋めあわせていった〔同上: 38〕。彼は一貫性と統一性をもった「生きた過去」の叙述に努めるなかで、おそらくは、中国との政治力学か

ら発生しただろう幾多の風雨にさらされながら孤独に放置されてきた定界碑に、「祖先が耐え忍んだ日々と生活」を発見し、そんな過去を「改めて生きる」べく〔スミス 1999:212〕、朝鮮人のエスニシティを喚起しようとしたのだろう。

そこにはぐくまれるのは、「以前の状態や、理想化された原初的な過去のイメージへの回帰を求める」、郷愁を帯びたエスニシティ主義である。エトニは内憂外患的状況に直面した際の防衛策として、しばしばエスニックな抵抗や文化復興運動などを含むエスニシティ主義を鼓舞される〔同上:60-66〕。ちなみに不咸文化論には、日本よりむしろ中国に対するエスニシティ主義が投影されているという〔崔 1999:54、川村 1996:37-39〕。スミスはエスニシティ主義の前近代的多様性として領土回復、血統回復、文化刷新の三つの運動をあげるが、本章冒頭の陳泰夏の例に見るよう、分断により白頭山から遮断された韓国人にあっては、その多くが崔南善など近代知識人たちの手になる「創られた伝統」(檀君神話の正統化と白頭山への崇拜、愛国歌と愛國儀礼、開天節、檀君肖像など)のもと、ことに領土をめぐるエスニシティ主義が明瞭にあらわれてくる。ゆえに韓国人による白頭山旅行はある部分、神話的な過去に遡及するエトニの「巡礼」として理解される。

次章以下では「弟との出会い」をライトモチーフとしながら、韓国人／朝鮮族をとりまく諸現象について、グローバル化時代のエスニシティとナショナリティの葛藤という局面から検討を進める。

2. エスニシティとナショナリティをめぐる葛藤 状況

(1) 画期としての「1989年」

大韓ナショナリズムに即して白頭山一帯を民族のユートピアとし、郷愁を求めるロマンチックなエスニシティ主義の傾向は、むしろ中国との国交樹立前に白頭山行きをかなえた一部の人々の旅行記に見受けられた。その多くは、香港の珠海大学で招聘教授をしていた1984年、深圳での学会参加を足がかりにそのまま白頭山をめざした陳泰夏の例に見るように、学会や学術交流などの大義名

分が立ちやすい学者や医師といった知識人層、ないし外国籍の韓国系移民である。ちなみに「弟との出会い」の「私」、国立大教授の李博士も、88年と92年に学術セミナーで延辺を訪れたことになっている。既述のように90年代初頭までは延辺の観光開発が進んでいなかったため、そこには旅行者との相互作用を通じた地元民によるパフォーマンスやサービス、土産物などの創出、つまり「観光文化」〔橋本 1999:4〕などは生まれるべくもなかった。それゆえ彼らの旅行記は一方的な他者表象にとどまる観を呈し、そこに展開する世界は詩的空間と黄金時代に満ちている。ある者はこの道行きを「長い歴史の故郷へと向かう帰郷」〔金 1992:30〕と形容し、またある者は「受難のわれわれにも誇らしい征服者の歴史〔高句麗、渤海の時代をさす:筆者注〕があった」〔鄭 1989:22〕と黄金時代に思いをはせた。白頭山頂の天文峰より「満州原野」を一望した陳のばあい、「今にも、馬にまたがり駆けていた先祖たちの勇猛な姿が見えるよう」な詩的空間を透視しながら、「白頭山に転がっている石ひとつさえ民族魂を叫んでいるようで、ぞんざいに踏むことができなかつた」と語っている〔陳 1984:114〕。

しかしながらこの時代には、共有された文化を通じてエスニシティを確認しうるという信頼感と連帯感が、まだ気分的には人々のあいだに存在していた。エトニの文化の体現者ともいうべき「私」——安東を本貫とする門中12代目の長孫——が、社会主義圏からやってきた異母弟と儒教祭祀の時間を共有したように。朝鮮族においては国交樹立のはるか前より、白頭山がそのエスニシティの代弁者となっていた。すでに70年代、「白頭山」と題する詩で、「切ないよ／あの漢拏山と手を取り合って笑える日／それはいつ？」と語りかけた詩人もいる〔金 1995:128〕。一方、白頭山で神秘体験をした女性は93年、山祈禱の際に出会った韓国人旅行者から自分の祀っている神「ハンベコム」が「民族の始祖・檀君」と知らされて以来、「心はいつも白頭山にあり……まるでわが家を訪れたような、そんな穏やかな気分になる」という〔金 1999:351-352〕。白頭山に檀君を結びつける大韓ナショナリズムが、同じエトニの証

として、両者のあいだに共有されたのである。

80年代末からの加速度的な世界資本主義化の流れは、そんな牧歌的なエトニの世界に甚大な一撃を見舞うことになった。西川長夫は、グローバル化の進行によってベルリンの壁が崩壊した「1989年」以降の、「文明概念に支えられたグローバリゼーションのイデオロギーを秘めていた」社会主義の衰退が、それとの対抗関係から解き放たれた世界資本主義のシステムを野放図に膨張させ、やがて「国家という制約と保護を失った資本主義がその最期をむかえる」ものと予測する〔西川 2001：376–378〕。韓国人にとって89年は海外渡航が全面解禁された年であり、前年のソウル五輪に前後しては、すでに「ソウルは世界へ、世界はソウルへ」と、まるでグローバル化を意識したかのような標語が流布していた。ここで世界資本主義の越境に連動するように、エトニもまた過去への遡及を求めて「国家という制約」を超えたのではないか、というのが本稿の視点である。ちょうど89年にトルコとの「コソボの戦い」敗戦600周年を迎えて、叙事詩*gusle*やギリシャ正教などの文化的要素を編み込んだ“セルビア神話”的もと、60万もの巡礼者を集めたセルビア・ナショナリズムの聖地コソボでの「政治の民俗化」の例〔Allcock 1993〕ほど顕著ではないにしても、ややタイム・ラグを帶びたかたちで、グローバル化の進行と世界資本主義化の流れは韓国でも、白頭山をめぐって同様の人の動きを確実にうながしている。

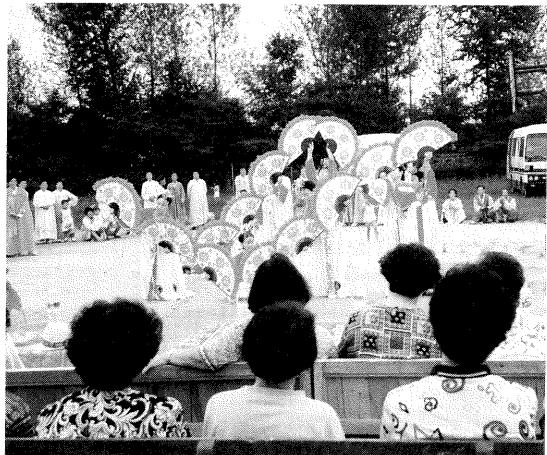
(2) 「まなざし」の《南》《北》問題

『韓国観光統計』の「行先」項目に初めて“中国”が登場した94年、7～8月の渡航者数はアメリカ、日本、タイに次ぎ、いきなり約25,000人を数えることになった。もちろん「弟との出会い」の登場人物たちのように、離散家族の消息を尋ねたい「私」、統一運動家、「北」からの密輸を企図する骨董商人など、それぞれに目的や魂胆を帶びた者もそこには含まれていたはずだが、大多数は旅行社主催のマス・ツーリズムの消費者たちであろう。彼らは「私」の目に映るごとく、男はみな一様に「ハントティング用のチョッキをユニ

フォームのように引っかけ、首にはカメラをぶら下げ、ジーパンもしくは半ズボンのいでたち、女もまた一様に「似合いもしない体の線が浮き出るようなデザインのズボン、またはキュロット」をはいており、服装も行動もきわめて画一化されている。かつては旅先で同国人に会うと親近感から話しかけさえしていたのに、最近は逆に嫌悪感を禁じえなくなったという「私」は、もとより旅慣れたエリートであり、「大衆の一部として見られること」に反撥する先駆的なポストモダン・ツーリスト〔アーリ 1995：155〕といえる。

かつて「私」のような人々だけで専有していた延辺への旅は大衆にも分有され、多くの労働者階級⁽³⁾が俗なる労働の時間から解放され、ひとときの聖なる時間として観光旅行に繰り出すようになったのである〔Graburn 1989：24–27〕。落合一泰は観光行為を《南》《北》問題として把握し、資本主義の力学より生ずるまなざしの高低によって、そこには文化植民地主義が展開されていると論じた〔落合 1996：56–59〕。このばあい、《北》は韓国を、《南》は延辺を中心とした朝鮮族の生活世界をさすことになる。

じっさい観光の場でホストとなる朝鮮族たちは、韓国人の多くを、郷愁を求めて旅するエスニシティの共有者と誤解している節があり、素朴な民族色を前面に出した自己演出はかえって「文化の客体化」〔太田 1993〕の失敗を思わせる。延吉空港に降り立つ団体客に対し、現地の航空会社はわざわざ韓服姿の女性職員を出迎えに立たせ、ホテルでは漢族の女性までを動員し、韓服姿で客の接待にあたらせていた（だがウリマルは全く通じない！）。朝鮮族のツアーガイドは客をバスに乗せるなり、「延辺には多くの同胞たちが暮らしております、これからそうした出会いが待っています」、「北京経由でいらしたとはいえ、きっとみなさんには韓国からじかに来たように感じられるでしょう！」などと語りかける。田舎の朝鮮族村を訪ねれば、観光客たちを前に、村人総出で歓迎の民族舞踊や民族音楽の宴が披露される（次頁写真）。けれども「観光」を主目的とした昨今の韓国人たちの目には、どれもが無粋にうつるらしい。筆者の参与観察時には、「野暮ったいマネはうつとう



朝鮮族村を訪問した韓国人観光客の歓迎会で、民族舞踊を演じる人々。場所は小学校の校庭で、手前の席に着いているのが韓国人観光客。
(遼寧省寛甸満族自治県宝山村; 1995年8月)

しいからよしてくれ」、「ここには、こんなみすぼらしい服しかないのか。なんならソウルから韓服一式、買って来てやろうか?」など、優越感に満ちた揶揄の声が聞かれました。ウリマルが通じる世界ではなおのこと、そこには落合の指摘する文化植民地主義が闊歩している。

まなざしの所有者である《北》の人々は、こうした《南》の朝鮮族との意識の「ズレ」に赤面し、彼らが演ずる民族文化を「まがいもの」と斥けながら、相も変わらず他者表象を通じた「真性さの追求」をこころみている。彼らに残された唯一最後の詩的風景は、川向こうに見る「北」の人々の暮らしぶりである。《北》のまなざしはカメラのレンズ越しに、もうひとつの《南》——経済開発から取り残され、昨今は飢餓や洪水で貧窮にあえいでいるという——をながめ、「郷愁」や「同胞」を写し撮ろうとする〔真鍋 2000:87〕。

そこには豊かな「観光文化」がいまだ生成されない代わり、興味深い「ツーリスト文化」の実態が観察される。たとえば祭祀の道具をもってツアーに参加したものの、「北」側の鴨緑江べりにあると記憶していた亡親の墓がすでにないのを発見し、絶望のあまり倒れて病院に運ばれた離散家族のハラボジの悲話などが口伝される。天池に行けば当然の所作として、両手をあわせて拝礼し、その水をペットボトルにつめ帰る人々の姿が目にと

まる。一方、大韓ナショナリストたちは、白頭山にいたるまでの険しく、他国を迂回しての屈辱的な、そして抗日運動の苦難の痕跡をたどりながらの道行きを、「白頭山に対する一種の発願、斎戒」(S旅行社の観光冊子『白頭山・高句麗文化遺跡地大探訪』による)になぞらえ、ようやく到達した山頂では白頭山への独特な儀礼的行為をとりおこなう。2001年8月にS旅行社が企画した白頭山・高句麗遺跡探訪ツアーの日程表には、「天池の水を飲み、統一祈願祭をおこなう」とのプログラムが明記されている。天池の水は玉水とされ、これで汗や汚れを洗い落とすなどはもってのほかだ。また統一祈願祭とは天池を隔てて「北」に向かい、愛国歌を歌う、“統一万歳”を叫ぶなどの行為をいうが、これは「北」を刺激するとの理由で、じっさいのところ96年に中国当局より禁じられているのである。

上記の点はじつは中国のナショナリティとの角逐を意味する。95年には韓国で「満州はわが領土」とする運動が展開されたが、以来、「韓民族の北方領土意識と間島領有権問題」と題する学術大会が開催されたり(97年)、満州領有の根拠を歴史的、政治的、国際法的に主張した論集の刊行〔白山学会 1998〕、復刊〔陸 2000〕が相次いでいる。かかる現象を危惧する中国政府は東北三省に韓国領事館を作らせらず、それは「韓国の民族分離政策を警戒しているからにほかならない」し、朝鮮族の多くも「中国人として生きることを望んでいる」〔チョン 1996:138-139〕。にもかかわらず、満州領有権を主張している韓国人のエスニティ主義は、同じエトニであるはずの朝鮮族の頭越しに、中国当局のナショナリティと葛藤を演じているのである。最近、朝鮮族社会では韓国人とのさまざまなトラブルから反韓感情が増しているが、両者のコンタクト・ゾーンで生じつつあるもうひとつの葛藤状況を、以下に世界資本主義の《南》《北》問題という視点から考えてみたい。

(3) 世界資本主義の《南》《北》問題

朝鮮族の立場からすれば、世界資本主義化の流れにそった中韓国交樹立と韓国人旅行者の激増は、観光という消費行為を通じて《北》から《南》へ

の合法的な資本と利潤の流れを作り出すはずであった。しかし実態はどうであろうか。

まずは中国政府－朝鮮族という二元性から事象をながめる必要がある。78年に経済改革・対外開放政策を始めた中国政府は、外貨獲得の効率的手段として国際観光に着目し、現在は辺境の少数民族地域における観光資源の開発に力を注ぐ。理由としては第一に地域格差の縮小、第二に少数民族の文化的多様性をむしろ「中華民族」のアイデンティティとして表出させ、観光活動を通じた国民形成をうながしたいとする国家的な意図、が考えられる〔曾 2001：88〕。白頭山に関しては、まずユネスコがこの一帯を中国初の国際生態環境保護区に指定（80年）したことを受け、当局ではエコ・ツーリズムの開発に着手した。あわせて景観的資源の活用のため森林鉄道を敷設し、同時に複数の登頂ルートを開発することで、年間を通じたコンスタントな集客を見込んでおり、2020年までにアミューズメント・パーク、スポーツ施設、教育施設、多目的施設などを完備した和平リゾートと松江リゾートの造成が予定されている〔Kim 2000〕。他方、周辺のホテル稼動率は年平均40%（98年：大半が夏場以外は閉鎖するため）だが、日中合弁のインターナショナル・ツーリズム・ホテルだけは例外的に95%の稼働率を記録した。その他、外国資本では、大字がアルペン・スキー訓練のためのホテルを所有する〔ibid., 80〕。かように観光利潤は巧みに当局へと流れ込むか、現地のあらゆる利便を掌握する多国籍企業に回収されるしくみになっており、当の住人の朝鮮族はほぼ疎外された状況といわざるえない。

次に、非合法的な資本と利潤の流れを見てみよう。ここにもまた「国家という制約」を超えて、国交のない二国家のはざまで、法の目をかいくぐり利ざやを稼ごうとする人々がいる。だがそうした売買によって《北》から《南》に流れる利潤は、後者にとっては莫大でも前者には僅少なもので、結局はそれを元手に《北》が潤うだけとなる。「弟との出会い」で、韓国の経済力による「吸収統一」をめぐり、くだんの骨董商人が無条件の反対を主張する統一運動家と論戦を繰り広げる場面

がある。また韓中、「南」「北」の文化交流の仲介役となっている延吉大の柳教授が、「私」に対し次のように問いかける場面がある。

「吸収されるとか、するとか……これが自由民主主義社会の思考というものですか？」

これらの場面はグローバル化がもたらす歪みを告発する。合法的・非合法的を問わず、「自由民主主義社会の思考」に縁取られた世界資本主義化的波は、先のジェノバ・サミットのおり、会場の外で反グローバル化運動が展開した「多国籍企業によるグローバル化」批判が明るみにしたように、じじつ《南》《北》間の溝をさらに押し広げただけであった。

さて「経済改革・対外開放政策」という中国政府の掛け声で、いきなり自由主義経済の奔流に放り込まれた人々は、自由競争での生き残りをかけ《北》への出稼ぎをめざすようになった。近年、朝鮮族社会に反韓感情が蔓延している背景には、韓国に職を斡旋するといって詐欺をはたらく者が跡を絶たないことや、首尾よく渡韓できても不法就労扱いで、劣悪な環境と低賃金のもと、いたずらに労働力を搾取されるだけといった韓国体験のトラウマがある。朝鮮族作家の全秉七は、朝鮮族の歴史的苦難を代表する20世紀の10大事件のひとつに「韓国熱風とその悲劇」をあげるが、なかには在中韓国企業が会社ぐるみで朝鮮族への就労斡旋詐欺、偽装結婚詐欺をおこなっていたとの例もある〔全 1999：291－327〕。注目したいのは、朝鮮族がエスニシティへの信頼感をもって韓国をめざしたのに対し、詐欺や搾取をおこなう一部の韓国人は世界資本主義の思考によって、また韓国政府は民族（ethnicity）より国籍（nationality）を重視する政策への切り替えをもって、その期待を裏切ったことである。

80年代から90年代初頭にかけては朝鮮族による親族訪問を歓迎するムードだったが、その後は政府もメディアも一転して、彼らに不法就労者のレッテルを貼り、これを遮断する側に回ったのである〔Moon 2000：156－159〕。日系人には無条件に永住権を与える日本政府の方策と違い、韓国政府はエスニシティよりナショナリティを優先させた。「北朝鮮の同胞を受け入れる際、前例とし

て参考になるから」、「韓国での朝鮮族在留問題こそ統一への試金石」〔チョン 1996:138〕と、エスニシティの重視を期待する朝鮮族の思いとは裏腹に、当局は「北」=共産主義の扉を開く媒介者として彼らをとらえ、結局、その不信感と警戒心を解こうとしなかった。こうした脈絡から「弟との出会い」を読み解けば、延辺での肉親さがしを企てる「私」の前に「安企部要員」があらわれて警告を発する場面などは、じつに象徴的といえよう。“国立大教授という身分”的なナショナリティに緊縛されざるをえない「私」は、それでもなお儒教的規範を内在化したエトニのひとりとして奮闘する。その背後では、従来の「反共、反北ナショナリズム」が、「世界化」という耳ざわりのよい“新たなナショナリズムの言語”にすり替えられるなかで、「吸収されるとか、するとか」、また「解放されるとか、されるとか」いう、互いが互いの「吸収統一」を期したふたつのナショナリティが、相も変わらず拮抗している。唯一崩壊を免れている「北」の社会主義体制とこれに対抗する「南」の資本主義体制が、いずれもいまだ先駆的に「文明概念に支えられたグローバリゼーションのイデオロギーを秘めてい」るのだから。つまり互いが互いにとっての「失われた領土」で、どちらも大韓ナショナリズムの正嫡を名乗るだけに——「北」では金日成神話として⁽⁴⁾、それぞれ大国の力を借りたふたつの「統一ナショナリズム」〔李 1999:46—49〕は、同じエトニでありながら、否、それだからこそ、現在も合流できずにはいる。ただ朝鮮族だけはその両義性ゆえ、ここでもまた境外におかれている⁽⁵⁾。

おわりに——エスニシティの復権に向けて

エスニシティの復権に向けた動きが、「統一運動家」の分身たちのあいだで盛んである。分断による「国家という制約」自体を認めず、エトニたちの「幻のネイション」を夢見る彼らは、かつてこの夢を阻む“分断勢力”としてアメリカを名指し、「反米帝」を主張した。そのような思考は、「小国」という自己規定を逆手にとり、「悪いのは、小国を見殺しにする大国」として大国からの支援

を引き出し、優位に立とうとした李承晩初代大統領の「小国型ナショナリズム」〔木村 2000:335—357〕を反転させたものといえよう。だがグローバル化、世界資本主義化は「アメリカ化」とも換言されうるわけで〔西川 2001:380〕、これに抗する昨今の（きわめてグローバル化された！）反グローバル化の運動は、かつての「統一運動家」たちをふたたび表舞台に引き戻す。たとえば三八六世代を中心とした市民運動の百花繚乱ぶり、延辺で詐欺被害にあった朝鮮族を救済する「ウリ民族助け合い運動」や「在中同胞問題市民対策委員会」の結成など（1996年）の事例〔全 1999:323—324〕は、上述のごとき世界的な鳥瞰図に位置づけてみることができるだろう。

一方、別の意味でめざましい活動を展開するのは、白頭山の初登頂者・陳泰夏である。彼は92年以来、韓国国語教育学会会長として、世界中の同胞のこどもたちを対象としたハングルによる「友情の手紙コンクール」を主宰している。自身、「民族統一の芽を育てる」というが目的だと明言するように、そこにもまたネイションを超えたエスニシティの復権がもくろまれている。じっさい入賞者たちの文集には『世界가 한(韓)동네』(韓国国語教育学会、1998年)という、きわめて野心的なタイトルが付されている。ところが世紀末のIMFショックは、陳をして、また新たなる運動へと突き動かすことになった。すなわち「全国漢字教育推進総連合会」の旗揚げ(98年)がそれである。21世紀の漢字文化圏の復権こそが、いまや終焉にさしかかった西欧文明化のオールタナティヴであり、そこで生命線は「半文盲の文字生活」を送るハングル世代の若者たちにきたるべき時代の公用語・漢字を教育することである。この運動の趣旨に見出せるのは、グローバル化に代わる「新たなインターナショナリズム」——各「国民国家」を維持しつつ「超民族国家」をめざすEUを見るように——〔西川 2001:390〕の胎動であろう。しかも陳のばあい、ハングル教育と漢字教育の両運動が違和感なく同時進行されていくのだ。

白頭山での体験や朝鮮族との出会いは、グローバル化のなかで起こった出来事であり、その後、

グローバル化それ自体へのカウンターないしはオールタナティヴとして、彼らの人生を方向づけているように感じられる。それでいて彼らの活動は——逆説的だが——、グローバル化によって支えられてもいる。本稿はこの段階にいたるまでの歴史社会学的なラフ・スケッチにすぎず、その深い意味にはとうてい迫りえていない。筆者にとって白頭山と檀君崇拝をめぐる韓国人／朝鮮族へのインテンシブな研究の旅は、ようやく緒に就いたばかりのところである。

- (1) 1995～97年度にS旅行社が取り扱った白頭山「巡礼」の団体客は、地方自治体や企業などの依頼による3団体（計48名）に、「大学生世界教育紀行」の3大学（計190名）、「中国史、統一紀行」の26団体（計2,693名）で、これは同社における海外ツアー商品の全利用者中、61%強にあたる数字である。なお同社をはじめ本稿で言及する資料や参与観察は、いずれも99年6～8月、旅の文化研究所からの助成を得て実施した現地（韓国、中国）調査と研究活動の成果の一部である。
- (2) 檀君教史をひもとくと、すでに1904年、白峯という人物が檀君からの靈戒により白頭山で山祈禱をおこない、その結果、經典『三一禮誥』および『檀君實記』を発見したとされる。檀君教は1909年、その經典をもとに布教が始まられた〔済上 1995：55〕。ここに見出される白頭山と檀君崇拝との結びつきは、後述する崔南善の緒論に20年余りも先立つ觀念であったといえる。
- (3) 業界大手のK旅行社の添乗員によれば、白頭山「観光」者のばあい、ツアーには慰安旅行として参加する工員や、農民などの低所得層が多いが、旅行資金は「契」や「孝道旅行」などで準備されるようだという。後者は読み書きできない中高年が多くを占めるため、旅行社で出入国カードを代書する際、職業欄は全部「会社員」で処理している。よって「観光統計の職業分布比率には信憑性がない」とのことであった。
- (4) あるいは94年秋の「檀君の遺骨発見」、翌年の「檀君墓」竣工のニュースが記憶に新しい。
- (5) むろん、その両義性（バイリンガル、「南」「北」いずれにも入国でき、いずれの親族も訪問できる、など）を強味として離散家族から仲介料を稼いだり、韓国での出稼ぎがうまくいき成功者として帰国する朝鮮族もいる。本稿には、こうした人々の存在を留保し、朝鮮族社会の多層性や人々の個別性を勘案せずに、朝鮮族のネガティブな局面だけを“弱者”として切り取り“他者表象”する意図などは、もとよりない。しかしながらテーマ設定の性格上、“強者”的朝鮮族については記述が手薄にならざるをえなかった点を断っておきたい。

〈引用文献〉

- 太田好信「文化の客体化」『民族学研究』57—4、日本民族学会、1993年。
- 落合一泰「《南》を求めて」山下晋司編『観光人類学』新曜社、1996年。
- 川村湊『大東亜民俗学』の虚実』講談社、1996年。
- 金錦子／真鍋祐子訳「巫堂と氣功」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団（代表：竹田旦）編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』第一書房、1999年。
- 木村幹『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』ミネルヴァ書房、2000年。
- 崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、2000年。
- 曾士才「中国における民族観光の創出」『民族学研究』66—1、日本民族学会、2001年。
- チョン・ボクヒ「朝鮮族から韓国社会を見れば……」仁科健一・館野哲編『新韓国読本5——異邦の韓国人・韓国の異邦人』社会評論社、1996年。
- 西川長夫『増補・国境の越え方』平凡社、2001年。
- 橋本和也『観光人類学の戦略』世界思想社、1999年。
- 原武史「大韓帝国と『帝国』の思想」『大航海』10月号、新書館、1999年。
- 渕上恭子「韓国の民族宗教とキリスト教」『宗教と社会』創刊号、「宗教と社会」学会、1995年。
- 真鍋祐子「現代韓国のナショナリズムとツーリズム」『旅の文化研究所 研究報告』9、旅の文化研究所、2000年。
- 李鍾元「ナショナリズムの転形」『大航海』10月号、新書館、1999年。
- 梁賢惠『尹致昊と金教臣 その親日と反日の論理』新教出版社、1996年。
- アーリー、J./加太宏邦訳『観光のまなざし』法政大学出版局、1995年。
- アンダーソン、B./白石さや・白石隆訳『増補・想像の共同体』NTT出版、1997年。
- スミス、A.D./巢山靖司・高城和義ほか訳『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年。
- ホブズボウム、E.「1 序論——伝統は創り出される」ホブズボウム、E.&レンジャー、T.編／前川啓治・梶原景昭ほか訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年。
- 金三淵『懷千古』図書出版忠武（ソウル）、1992年。
- 金東湖『泣き笑いする停車場』延辺人民出版社（延吉）、1995年。
- 白山学会編『韓国の北方領土』白山資料院（ソウル）、1998年。
- 全秉七『20世紀朝鮮族の10大事件』環境工業出版社（ソウル）、1999年。
- 鄭ビヨンイル『韓国人の満州』湖岩出版社（ソウル）、

- 1989年。
- 陳泰夏「愛國歌で歌った白頭山に登る」『自由公論』4月号、韓国反共連盟（ソウル）、1984年。
- 崔錫栄『日帝下の巫俗談論と植民地権力』書景文化社（ソウル）、1999年。
- 崔南善『白頭山観参記』一信書籍出版社（ソウル）、1994年。
- 陸洛現編『白頭山定界碑と間島領有権』白山資料院（ソウル）、2000年。
- 李文烈『弟との出会い』図書出版ドゥンジ（ソウル）、1994年。
- Allcock, John, "Kosovo; The Heavenly and the Earthly Grown", Ian Reader & Tony Walter(ed.), *Pilgrimage in Popular Culture*, The Macmillan Press Ltd, 1993.
- Graburn, Nelson H. H., "Tourism: The Sacred Journey", Valene L. Smith(ed.), *Hosts and Guests*, Univ. of Pennsylvania Press, 1989.
- Kim, Jae Min, "Report; A Study of Tourist Demand and Accommodation in the Mt. Paekdusan / Chonbaishan Area", *Tourism Economics* 6(1), 2000.
- Moon, Katharine H. S., "Strangers in the Midst of Globalization", Samuel S. Kim(ed.), *Korea's Globalization*, Cambridge Univ. Press, 2000.
- Pai, Hyung Il, *Constructing "Korean" Origins*, Harvard Univ. Asia Center, 2000.